

---

# ダブル

北洋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ダブル

【Nコード】  
N1473N

【作者名】  
北洋

【あらすじ】  
限りなく遠く、果てしなく近い世界で……その世界にも地球はたった一つだった。何の違和感もない世界、たった一つのことを除いては。

その世界には月が2つあった、太陽が2つあった、そして同じ人間が2人いた。世界はそれを「ダブル」と呼んだ。  
そんな世界で少年を不幸が襲う。そんな少年の物語。

## 1（前書き）

オリジナル小説です。全8話予定、不定期更新していきます。  
感想等いただければ励みになります。

もし、自分が二人いたら、あなたならどうしますか？

どこかの国では、世界には瓜二つの人間が三人はいると言われています。しかしこれは決してそういう意味ではありません。

顔から体、指の先から穴の毛まで、あなたと同じ人間がいたならば、あなたならどうしますか？ つまりそういうことです。

自分の代わりに学校の宿題をやらせる？ 自分の代わりに仕事をしてもらう？

なににせよ、誰だってメリットになることを望むはず。

自分が二人いるのなら、意のままに操れる第二の自分であって欲しい、誰もがそう望むはず……。

ですがそれは不可能です。

それは、その人間が、一個人としての意思がなく単なる道具としてあつかえ、て、始めて可能になる話なのですから……。

まずそんなことはありえません。同一人物でも育つ環境だけで、能力や性格、考え方や身分まで違ってしまふのです。

ここでもう一度訊きましょう。自分が二人いたら、あなたならどうしますか？

これはそれが当たり前な、極めて近く、限りなく遠い世界でのお話、

本物とそれとまったく同じな偽者が同時に存在する、そんな世界での出来事です。

俺は神を信じていない。

これは俺だけに留まらず世界中多くの人が思っていることだろう。この世に神も仏も居ない、そう感じ始めて俺は短くなかった。そんなある日、俺は神がいないことを確信させられる出来事に、学校帰りに寄った街の大病院の診察室で遭遇した。

「これは、重い心臓病ですね」

外来を担当していた研究医が素っ気無く、俺の胸部レントゲン写真を見て言った。

もちろん、俺は耳を疑る。

ここは病院、外来の診察室。

電子カルテ用のパソコンが置かれた医師用机に向かい合うようにして、今俺は患者用のクルクル回る丸イスに腰を下ろしている。

幼いころ、小学生時分にはこのイスで回るのが面白く、バカのように回りたい衝動に駆られた記憶があるが、もうそんな歳でもない。

俺ももう十七、地元高校に通う高校二年生だ。

で、だ。もちろんおかしいとは思っていた。

単なる体調不調だとたかをくくっていた（胸の痛みを覚えたが）のに、妙に詳しく検査されるものだからなにか悪い病気ではないかとは懸念はしていたが、心臓病だと？……そこまで重く考えていなかった俺にとってはまるで言うていいほどまるで現実味がない。

それに、そんな重い病気なら医師も歯にものを着せた言い方をするのではないか？

だが医師は小学生のお手本にでもなるかのように、はきはきと現実を宣告してくる。

「病名は肥大型心筋症、心室壁の筋肉が異常に肥大して心機能が低下する病気です」

聞き慣れない単語に俺の頭は混乱した。ひだいがたしんきんしょう？　なんだそれ、心臓病なの？　それが俺の感想だった。

それが本当ならば、この世にやはり神はいないのだ。

生意気にも猜疑心を抱いた俺は、これまた生意気にも馴れ馴れしく訊く。

「マジっすか？」

「マジですよ」

「じゃ、じゃあ治療法は……？」

「残念ながら発症を防ぐのは今のところ不可能です。それどころか病気の進行を止める手立てもわかっていなんですよ」

まるでマシンのように告げる医師の言葉に、

「そ、そんな……」

俺は絶望とはこういうことかと初めて知った。黒くて重いなにかが押し掛かってくるような感じ。それが俺の中身を侵食していくようなそんなイメージ。自分の日常が崩れ去るような……これが絶望なのだろう。

だが次の医師の言葉は、天から垂らされた蜘蛛の糸のように俺に希望を見せてくれた。

「ですが治療法がないわけではありません」

「マ、マジっすか!？」

「大マジですよ」

俺はその系にすがりつく。

その系の正体を医師はこう述べた。

「この病気に陥った場合、治療法は心臓移植に頼るしかありません。現在の医療では、根治するにはこの方法以外に治療法はないでしょう」

「じゃあ、それをお願いします!」

俺は糸を必死に掴んだ、掴もうとした。

けれど蜘蛛の糸なんて所詮はあれさ、人間の重みに耐え切れるわけがない。

医師は糸をプツリ切るは鉄のような一言を放った。

「わかってませんね」

「え？」

「それが簡単にできるのなら、なぜ臓器移植を待つ人が世界中にごまんといえるのですか？ できないからでしょう。ましてあなたの場合、腎臓などではなく心臓です。

拒絶反応の関係もありますし、移植できる可能性に保障できませんね」

俺は再びどん底に叩き落された。

医師は呆然としている俺を一瞥すると、背もたれつきのイスから立ち上がり、俺に背を向けて窓際から外の風景を眺める。

俺は放課後を利用して病院に足を運んだので外は既に薄暗い。自

然の少ない街にある病院の中庭、人工的に植えられたしがない緑が  
ライトアップされ、癒しのオーラを開放していた。

「ですが安藤正樹さん。一つだけ、確実に助かる方法があります」

俺は反射的に顔を上げた。

まるで後頭部に口があるみたいに、その医師は背中を向けたまま  
言う。

「あなたは、ダブルという存在を知っていますか？」

俺の知っているものだった。

夜、深いとまではいかないが、十分に暗い夜の入り口の時間帯。  
診察を終えた俺は、人工の光が輝く街を離れ、結構に黒く染まった道を歩いている。

「ダブル、か……」

医師の一言を反芻し、途方にくれていた。

ダブル。

聞いたことがある、いや、小学校の頃からなんども繰り返し繰り返し教師から耳にたこができるほど聞かされ続けてきた。イヤでも覚えてしまう。それは小学校の生活の本のページ目、目次にも堂々と名を連ねていたし、中学校の歴史の教科書にも姿はあった。

ダブル。

決して、同じ学年を二度続けることではない。

二倍や二重という意味と思ってくれても差し支えない。

もっと端的に表現すれば「二人目」とか「偽者」というほうが正確だろう。

いつの頃からか、この世界は全ての存在が二つになった

いやなつたのだと、俺は聞かされている。物も、動物も、人も全てが二つになった。これだけ言えば、ただの気が狂った輩の戯言と済まされてしまうのだろうが、空を見上げていただければきつと納得してもらえるはずだ。

## 月が二つあった

黄金色の皿のように丸い、満月が二つ俺を見下ろしていた。模様も同じだ。

加えて言えば太陽も二つあるのだが、俺にとってはこれが生まれた頃からの当然の風景である。だが昔はこうではなかったらしい。なにが理由で太陽と月が二つになってしまったのかは不明だが、これが‘ダブル’というやつだ。

一つだったものが二つに、そしてどちらがどちらか見分けが付かない。もっと明快にわかりやすく言えば、ダブルとは要するに本物とまったく同じ偽者である。さっきの月の例で言えば、同時に打ち上げた月面調査船の持ち帰った両の月の構成物質はまったく同じだった。太陽で言えば黒点の位置などが二つとも全て統合する。

要するに、完全無比なまでに本物と同じ偽者、それがダブルなのだ。

そしてダブルが存在するのは物だけに留まらない。

## 人間だって例外ではなかった

世界中の人間それぞれにダブルが一つ存在するらしい。顔から体指先から穴の毛、そして染色体に存在するDNAの塩基配列まで完全に同一な人間が世界中の何処かに一人いる。見分ける方法があるとは俺は聞いてはいなし、普通は出会うことはなしに人生は終わってしまうと言われている。

何処から現れ何処に消えていくのか、ダブルとはなんなのか、そ

の存在がわかっていながらなぜ誰もダブルの存在に気づかないのか、謎を考えあげればきりが無い。しかし政府もこの調査を早々に打ち切った。ダブルを見つけ出す方法はある、だがそれがどうした、真偽を見分けられなければ意味がないではないか。

真偽交合ながら平穏といえる六十億人の生活を脅かしてまで、三十億人の偽者を絞り上げることに意味はなかった。

それに、ダブルは社会構成の単位として細部にまで既に浸透してしまっていたのだ。ダブルが仕事を持ち、本物とは全く関与せぬ場所家庭を持ち、生活している。ダブルという存在自体は謎に包まれていたが、それが普通となっていた。

だが間違はなく、一人、俺の偽者がいる。  
それが俺の命を救う方法。

「ダブルは本物と遺伝子レベルで同じ偽者。ダブルの体は俺の体と同じ。その心臓を移植すれば、それは俺に拒絶反応もなしに完全に適合する」

納得のいく話だった。

確かにその方法なら確実に助かる。俺としては、移植順をただ待つのがなんかより遙かにいい。

だがここで一つ問題が浮上する。

どうやって見つけるかだ。単純だが恐ろしく難しい問題。それに俺は途方に暮れて、トボトボと歩いていた。

「まったく、どうすりゃいいんだよー」

と、俯いてぼやいていたときだ。

「うわわわわっ、危な――い！」  
「え？」

顔を上げると、すっかりライトをつけた自転車が俺に向かって突っ込んできていた。

危ない、そう思ったときにはもう遅く、体を捻って避けようとしたものの正面衝突してしまふ。自転車に乗っていた奴はサドルから吹っ飛び、俺は自転車を受け止めるようなかたちで仰向けに倒れた。アスファルトにぶつけた頭ががんがん痛む。男と決まったわけではないが、野郎、ただでさえ悪い成績がさらに悪くなったらどうしてくれるつもりだ。俺はぶつかって来た相手を睨みつけた。

「てめえ、何処に見てやがんだ！」

「ご、ごごごめんなさいっ」

そいつは俺と同じように学生服（他校の）を着ていた。

少し距離がある上に暗いので顔はよく見えないが、背格好が俺にとっても似ている。おどおどとした声の調子で謝りながらそいつは俺に近づいてきた。こけっ放しの俺に手を差し伸べてくれる。

「なっ……！？」

だが俺はその手をとることはなかった。正確には、近くまで来て見えるようになったそいつの顔を見た途端瞳が止まり、手をとる事ができなかったのだ。

同じだったからだ。

髪型は違った。だがスラリとした眉、二重まぶたに整った目鼻立ち、まるで鏡の前にもいるかのような錯覚に陥るほど二枚目で（と俺は自負している）瓜二つだ。世界には三人自分のそっくりな人間がいるというが、これは……湖面に映った自分の姿がそのまま現世に体現してしまったかのようである。

似ている、そう思ったのは相手も同じだったらしく俺の顔を見て

目を白黒させていた。

「あああああああああああああつっ!!」

そして絶叫。これは俺もだが、あまりの驚きに互いの顔を指差して3mほど後ろへ跳び下がってしまった。

「なんで俺が二人いるんだ!？」 「なんで僕が二人いるんだ!？」

叫びの内容もタイミングも完全に同じだった。唯一違うの人称だけ。

もうわけがわからない、と。

「ひひひひひっ!!」

俺にそっくりのそいつ（微妙にややこしい）は、情けない悲鳴を上げて猛スピードで逃げていつてしまった。

だが、気持ちはわからんでもない。人気のない道（現にそいつが去ってから俺一人しかない）で夜中に、自分と同じ顔をした人間に出会ったんだから不気味でしょうがないだろう。俺の足も力を失いガクガクと震えている。

そのときは、そいつが手帳らしきものを落としていったことに雨露ほども気づいてはおらず、

「び、びびったあ……」

俺はその場に崩れ落ちたままで、少年が走り去った方向を呆然と眺めていた。



ダブル。

ベットのことでない。あくまでシングルのそのベットは俺が腰掛けると、体重で弾力感を生み出すためのスプリングが軋む。安っぽいそれから供給されるリラックスなど今の俺の精神状況を落ち着けるには程遠い。

帰宅して、自室に戻った俺の頭によぎるのは、医師に病院で言われたその単語だった。

「似てたよな……他人の空似で説明できないくらい……」

螺旋を巻いているかのようにぐるぐると思考が繰り返す。

つい先刻人気のない路地で出くわした、髪型以外は俺の生き写しと言ってよい、あいつは誰だったんだ、と。

「もしかして、あいつ」

一つの可能性が俺の中に、それこそ突如巻き起こるつむじ風のよう  
に降臨した。

「俺のダブルだったんじゃない」

ダブル、それは唯一無二にまで本物と同じ偽者。遺伝子レベルで  
まで同一のそれが世界人口六十億の中に一人だけ存在している。今  
日、俺が見た俺にそっくりのあいつはダブルだったのではないか。

閃いた可能性とはそれだった。

約六十億分の一……確率的に考えればそれはほぼ在りえないことだ、パニツクになった頭が生み出した俺の幻想だといってもいい。

しかし、ゼロ、ではない。

頭では理解していてもその考えが頭から拭い去れない。現に、先ほどまで自分はそのことで悩んでいたではないか。ダブルを見つけるなど大金持ちのボンボンならともかく、ごく普通に平凡な民家で生まれた俺では協力を何処かに依頼することもできない。つまり可能性は皆無に等しかった。

政府だって、簡単にダブルが発見できればダブルの研究にもっと費用を裂いているはずだ。しかしダブルの見分け方その他は発表されていない（もしくはしていない）。唯一一般市民である俺が知っているのは、二つ。一つはダブルの肉体は本物が死ねば消滅すること、二つ目はダブルと認定された人間（過去数件に事例がある）には人権が認められないことぐらいだ。

後者に至っては耳にするとんでもなく聞こえるが、ダブルは偽者で、人間ではない。人権がないのは当然のことだった。

そして誰も、ダブル認定された人間の行く末を知らない。

もしかすると病院で医師が平然と言つてのけたように、ダブルの臓器は臓器移植用として使われているのかもしれない。だがダブルの肉体は本物の死と同時に消滅する。運が悪ければ、拒絶反応がなくても翌日に亡くなる可能性は無きにしも非ずだ。

そう考えた途端、俺の背筋を冷たいものが走った。実行されている確証などありはしないのに、想像だけが勝つてに先走ってしまう。

「ほとんど人体実験だな……」

だがその問題も本人のダブルなら万事解決だ。

先にも言ったが、ダブルの肉体は本物の死と同時に消滅する。ちなみにこの消滅するとは、爆散したりすることではなく、影が闇に溶けていくように消えてしまうことだ（とのもっぱらの噂だ）。それが事実なのか、誰かの一言に尾びれ背びれが付いたものかは定かではないが、少なくとも俺は本当のことではないかと思っていた（度々推測めいて申し訳ないが目撃していないのだから仕方ない）。で、だ。ダブルの肉体が本物の死と同時に消滅するとして、だ。ダブルの臓器を本物に移植するとうなるのだろうか？

これは持論だが、今日出会ったあいつが俺のダブルだとしたら、俺は相当の幸運の星の元に生まれたいらしい。

俺はあの道端で拾った手帳を開いた。

安東真崎、十七歳>

そこには俺と漢字こそ違うが同姓同名、年齢まで同じという偶然と言い難いプロフィールが記されていた。それは通う学校こそ違うが、俺と非常に似通った生徒手帳の中身だった。

「マジっすか？」

ほんの少しだけ、神を信じてみる気になった。

放課後、俺が病院を訪れた頃には双子のように月が輝いていた。

「ほう、それは興味深いですね」

医師があいつ　俺にクリソツ（死語）で名前まで同じな安東真崎、この際、俺もどちらがどちらかわからなくなるので、あいつのことはマサキとでも呼称しよう　の生徒手帳に差し込まれた写真と俺の顔を、言葉のとおり興味深そうに見比べた。

その研究対象を見つけたような好奇の視線はあまり俺の好きな類のものではない。

「どう思いますか？」

俺が少し睨みつけて訊くと、医師は生徒手帳を机に投げ捨ててイスに座り、投げやりな風に答えた。

「どう思う、と訊かれてもねえ……正直、なんとも言えませんよ」

医師はもう一度手帳をパラパラとめくったが、ため息をついてこれを閉じた。

「顔が似ている。名前が同じ。年齢も同じ。しかしこれだけではねえ……ダブルより単なる偶然の可能性のほうが圧倒的に高いですよ」「やっぱり、そう思います？」

俺が確認で問うと、

「同一よりも似ているだけと考えるほうが普通です」

と返してくれた。

「やっぱ……そう考えますよねえ……」

その当然の返答に、俺は頭で理解していたことながら軽い失望を覚える。

そりゃそうだ。いくら俺が臓器移植順を待つのがイヤだからって、会いたいと思った矢先に、ダブルのほうからやってくるなど常識的な判断力を持っていれば、ない、と判る。そんな、偶然道端で落ちていたケースを開けると中に一億円入っていたような棚ぼたが、ふつつありえるはずがない……仮にあったとして、後で手痛いしっぺ返しがかかるのは必死だろう。

なにせ確立、六十億分の一だ。

だがそんなものにもすがり付きなくなるのが人情って奴で、俺は見事に肩透かしを食らって大きなため息を吐いていた。

「しかし、万が一ということもありますからね。もしこの写真の彼がダブルなら、世界で初めて本物とダブルが接触した事例になりますし」

医師がマサキの写真を再三見返す。

俺は、医師の言い方に違和感を覚えた。

「え……？ 初めて接触って、どういうことですか？ ダブルに認定された人間って少しはいるんでしょう？」

ダブル認定された人間がいるということは、少なくとも‘本物とダブルが接触した’ことに他ならない。

だってそうだろう？ ダブルってわからなければ認定なんてできないはずもないんだし、認定されただけで人権が無視されるんだ、気安く認定できるようなことではないはず　そう、俺は思っていた。

だが医師の言葉にそんなニュアンスは含まれなかった。俺が初めて接触者みたいに言っている。

医師が呆れたように俺の顔を眺めて口を開いた。

「ええ、確かにダブルに認定さてた人間は世界中に極少数存在していますよ。でも、それらが本当にダブルだったとお思いですか？」

「え……？」

「考えてもみなさい。あいつはダブルだから邪魔だ、排除しろ……なんて、邪魔者を社会的に抹殺するのには最高の手でしょうが。現在の私たちの知識では、理論的に誰々が本物とダブルとはわかって、どちらが本物でダブルなのか判断する手段は得ていないのです。それに先ほど言ったとおり、世界中で一度も本物とダブルは接触できていません……対比もせずにどうやってダブル認定をするのですか？」

医師の言い草に俺はいやな予感がした。そして予感的中した。

「よって、ダブル認定された人間がダブルである可能性は間違いなくゼロです……」

医師の眼鏡の奥の瞳が不気味に光ると、俺の背筋には悪寒が走った。

冗談になっていない、ダブルに間違えられるなんて最悪じゃない

か。人違いで殺されるのと同じかそれ以上に性質が悪い。

医師は話を続けた。

「それもこれも本物とダブルが接触した事例がないからなんです。本物とダブル、両者を同時に研究できれば見分け方もおのずとわかってくる。この写真の彼がダブルなら、それは歴史的瞬間なんですよ」

言い終わると、医師は細長い金属のスプーンを取り出して丸イスに座る俺に向き直る。

「というわけで、口を開けてください」

「は……なんで……？」

なにが、というわけでなのだろう？　ただでさえ信じ難い状況でのその要求に俺は困惑した。

医師はまたまた、今度は完全に呆れた表情で俺を見ると説明する。

「口内からあなたの細胞を採取します。理論的には、この写真の彼のDNA塩基配列と、あなたのDNA塩基配列が完全に一致すれば、あなたと彼は、本物とダブルの関係になりますからね」

「あ、なるほど」

俺は手のひらを叩いて納得した。

一卵性双生児なんてものもあるがあいにく俺は一人っ子だ。俺と同じDNAを持つのはダブル以外に存在しないことになる。

「要するに俺がマサキの体の一部を取ってくればいいわけだ」

「そういうことですね。はい、口開けて」

「ふあい」

俺が大きく口を開けると、医師がスプーンみたいな器具で口内の粘膜を擦って取る。

それをシャーレに移しかえると、

「じゃあ、よろしく願いますね」

頼み込んだのは俺ではなく、医師のほうだった。

彼は言う。

「もう一度言いますが、写真の彼がダブルならそれは世紀の大発見なんです。彼のサンプルは、くれぐれも私に持ってきてくださいよ」

医師は欲に眩んだ目で俺に念を押してきた。

世界で誰一人として知っていないダブルの判別方法という知識欲と、それを発見した有能な研究医として評価されより高い地位を得たいという野心。それがはつきり眼鏡の下から見て取れる。

俺は‘Yes’と答えたくはなかった。その目が嫌いだったからじゃない、俺自身がダブルと比較される実験台にされるのがイヤだったからだ。ダブルは人間じゃないから煮るなり焼くなり好きにすればいいが、俺は人間であり、意思決定の権利ぐらいもっている。俺は心の中で、医師に向かって‘No’と吐き捨てていた。

だがサンプルを持ってこないとマサキがダブルであるという確信は得られない。

俺は、自分の心臓のために洪々了承した。

「わかりましたよ。体の一部って髪の毛とかでもいいんですか？」

「構いませんよ」

「じゃあ、手に入れたら連絡入れてここに来ます。先生も鑑定のほうしっかりやってくださいよ」

「任せておいてください」

医師のそのいやらしい笑みに釣られて、俺は自分の顔の筋肉が緩んでいることに気づいた。

笑っているのだ。まだ確定した訳ではない。しかし移植する心臓の当が見えてきている。それは物欲に眩んだ、俺の嫌いないやらしい笑いだった。

居心地が悪くなり早くこの場を去りたいという衝動に駆られる。

丸イスから立ち上がると医師に背を向けた、とそこである事に気づき、俺は医師に訊いた。

「先生。もしマサキがダブルだとしたら、俺はどうすればいいんですか？」

「ああ、そのような問題もありましたか……ふむ、そうですね……」

……」

今更に気づいた問題は医師の心中にはなかったようだ。

しばらく考え、医師は言った

「殺してしまいなさい」

冷たく、冷たく……俺に向かって言うてのけたのだ。

殺す、その言葉が俺の背筋を硬くした。日常的に飛び交う冗談めいた言葉だったが、死と係わり合いの深い、いや、命を助ける立場である医師が言うものとは思えなかった。

彼のほうは至って真面目に俺に言い聞かせてくる。

「ダブルに逃げられては困ります。幸い、ダブルの体が腐敗する速度は人間のソレと比較にならないほど遅いのだそうですから、殺してしまっても、数日中に冷凍処置を施せば移植にも問題はないでし

よう。残ったサンプルさえ頂ければ私としても満足ですしね」

「…………でも、それって……殺人じゃないすか……」

「ダブルは人ではありませんよ」

即答。俺が意見すると医師はすぐさま切り捨て、話を続けた。

「安藤正樹さん、私が救うべき対象、それは人間であるあなたです」

「人間である、俺……」

「そうです。仮に写真の彼が重病を患っていても、彼がダブルなら私は彼に治療を行いません。なぜなら、ダブルは人間ではないからです」

なんと言っているかわからなかった。

医療は人の命を助け、健康を望む人々の手助けをするために日々精進を続けて、可能な限りのサービスを提供している。

だがその技術は人のためにあり　人間でない、ダブルのためではない。

医師にダブルに対する同情などひとかけらも感じられなかった。実験動物を見る科学者のそのように、ダブルを物としか見ていないことが医師の瞳からはありありと伝わってくる。マサキの手帳と一緒に、病院名が記入された紙袋に包まれた心臓病用の薬が俺の手に渡された。

だがなぜか？で調整されている薬がやけに重く感じられる。気持ちの問題だろうか、紙袋の中身を覗いていると確かに薬が入っていた。だがそれ以外の金属の物体が入っている。

それは折りたたみ式のナイフだった。

「では、お大事に」

医師がにこやかに言う。

それはお決まりの文句だったが、俺には、

「マサキを殺せ」

そう言っているように聞こえてならなかった。

診察室の窓からは、二つの月が仲良く俺を見下ろしている。

ダブルかもしれないマサキに備わった俺の顔が、陽炎のように脳裏に浮かび、沈んだ気分のまま俺は診察室を後にした。

診察（実際は相談だが）料金を支払い、病院を出る。

自宅近くの道とは違い、病院前の大通りは交通の流れが非常に激しかった。

延命手段が見つかるかもしれないというのに、俺の心は晴れない。神はいても残酷なものなのだ、と俺は感じていた。

重い足を自宅へと向け、俺は歩き出した。

昨夜と同じ光景。

ネコの双眸のような月たちに照らされ、昨日も通った道は薄暗く浮き立っている。俺のふらついた足取り、目に入ってくる家並みや電柱、車の行き違いがやつとの道幅……なにもかも同じように見えた。だが違う。意気消沈という点では変わらないが、今の俺は昨日の俺とは違っていた。

俺は心臓が欲しい。だからダブルを探す。しかしダブルを殺さなければ目的の心臓は取り出せないということまで、昨日の時点ではまったく思い至っていなかった。医師の冷酷な宣告を受けて初めて気づいたのだ。

ダブルを殺す。

その行為で罪を問われることは現在の法律ではありえない。マサキがダブルと判ってしまえば、俺があいつを殺してもなんら問題は生じない。

ダブルが人ではなく正体不明の偽者だからだ。従ってダブルを殺傷しても殺人とは認められない。またダブル認定を受けた人間も然り。

だがその前にマサキのDNAを入手しなければ。

今はとにかく、あいつが俺のダブルだという確証が欲しかった。だがマサキがダブルだとして俺はどうする？ 確かに、あいつの心臓を俺に移植すれば俺は死なずに済む。だがダブルとはいえ、殺しても罪にならないとはいえ、自分の顔をした人間を殺せるのだろうか。

か……考えるだけで胸がキリキリと締め付けられるように痛んだ。それは罪悪感からくるものではない、肉体的欠陥からくる痛み。

「うつつ……」

呻いて、俺はその場にうずくまってしまった。

呼吸が荒い。汗腺がドリルで掘り返されたみたいに大きく開き全身が汗でまみれる。太鼓でも打ち鳴らしているような拍音が頭を揺さぶり、手が小刻みに振動して言うことを聞かない。体験したことのない苦痛、かつてない恐怖が俺を襲っていた。

「な、なんだ……これ……」

胸が痛い、否、そんな悠長な次元ではない。

まるで体が内側から溶けてしまうような熱さと四肢を八つ裂きにされてもあまりある痛み。

これが心臓病か……。

「うつつ……」

アスファルトに四つん這いになった俺はもはやうめき声しか出せなかった。

医師から貰った薬のことを思い出したが体が上手く動かせない。

視界がぐるぐる回る。寂れた町並みが揺らいで見えた。

俺はだんだんとなにも考えられなくなってきていた。

だが、一つの感覚だけがやけにくつきり浮かび上がっている。

死の恐怖。その中で生きたいと願う俺の本能。死にたくなかった、生きたかった。

マサキの顔が浮かんで……消えた、そのときだ、

「大丈夫ですか!？」

本当にマサキの声が聞こえてきた。  
しっかりライトを灯火した自転車を横倒しにして俺に駆け寄ってくる。

意識を確かめようとしたのだろう、倒れている俺を抱き起こして、マサキは俺の顔を見てしまった。

「あ、き、君は……!」

驚愕、そして絶句。

揺らいだ俺の視界には、ぐにやぐにやに歪んだマサキの顔がある。それからでも驚きが簡単に見て取れる。水面に小石を投げ、起こったその水の波紋に投影されたような顔だった。

だが俺にはそれが俺の命そのものに見えた。

「い、今すぐ病院に……!!」

躊躇していたが、髪型が違うだけの俺　マサキは俺に肩を貸して起き上がらせる。そのとき俺は最後の力を振り絞り、マサキの髪の毛を掴んだ。そして数本むしり取る。だがマサキは気づかなかった。

手を硬く握りしめ、神を確信しながら、俺は意識を失った……。

DNA。

人間をはじめ、全ての生物は遺伝子を親から子に伝えることで種を繋ぎ、生命活動を継続している。それは、40億年前、地球上で初めて生命が誕生してから絶えることなく続けられてきた無限のループの象徴。それは、螺旋の中で組み変わった塩基配列によって種々様々な生命体を生み出し、雄と雌が交わることで子孫を残す能力の源。

DNA、すなわちデオキシリボ核酸とはその遺伝情報に乗せた‘遺伝物質本体’であり、生物である以上は全ての細胞に必ず存在している。

そしてDNAの遺伝情報は、A・T・C・G四つの‘塩基’と呼ばれる分子の配列によって暗号として形成されている。

よくテレビなどで目にするDNAのモデルは二重のらせん階段を呈しているが、その中に目で数え切れないほどの‘塩基’が並べられ、その人だけのDNA‘を作っているのだ。人のDNAの塩基数は約30億個、気が遠くなる数の‘塩基’が織り込まれているDNAに同一というものは例外を除いて存在しない。

ではその例外とは何か？

簡単だ。‘クローン’と、‘一卵性双生児’と、‘ダブル’である。

安藤正樹を診察した医師 白河修もそんなこと承知していた。

「ふっ」

薄暗い研究室で一人、彼は笑いをこぼす。

彼の手には安藤正樹が持っていた頭髮が握られていた。

先日、安藤正樹はマサキによつて病院に運び込まれてきた。発作を起こし瀕死だった彼は急ぎICUに搬送され彼の処置により一命を取り留め、今では意識もしっかりしている。その彼に手渡された物がこの髪の毛なのだ。

「ダブルですか、よもやこの目で見ることにするとは思いませんでしたよ」

誰もいない研究室での独り言は不気味さを孕んでいる。

白河医師は安藤正樹を救ったと言える少年の姿を思い出した。

瓜二つ、どころではなかった。顔が同じなのは写真で先刻承知だったがそんなレベルではない。既視感を覚えるほどの同一性。一見ただけで確信できた、彼がダブルだと。もちろんそれは安藤正樹という少年の存在があつてのことだった。

とにかく、歴史上初めて本物とダブルが同時に存在する場面に彼は出くわしたのだ。研究医としてこのシュチュエーションに興奮せずはいられない。

白河医師は安藤正樹から採取した細胞とマサキの頭髮をDNA鑑定装置にセットした。

スイッチを入れると作動音とともに装置から薄緑の光が洩れ始める。画面上では二つのDNAの二重らせんが重なり合い、チ力チ力とフラッシュしながらものすごいスピードで塩基配列が読み取られている。ものの数分で鑑定結果がプリントアウトされるはずだ。

そして、ダブルだと判ったならば……

「殺してしましよう……逃げられては厄介ですしね」

白河医師は白衣の下に手を入れると、隠し持っている拳銃を触れて確認した。

デザートイーグル。

357マグナム弾をオートマチックで連続発射可能な世界最強のハンドガン。入手経路は彼にしか分からないが、自他共に認めるミリタリーマニアの白河医師、そのご自慢の一品である。黒光りした銃身持つものを狂気に走らせそうな、そんな印象さえ受ける。

チンッ。

三分が経過した時、装置から電子レンジと聞き間違えそうな効果音が聞こえた。プリンターを振動させながらコンピューターから鑑定結果が出力される。

デザートイーグルを撫でていた白河医師もその音に我に返り、プリンターから排出されたA4サイズ用の紙を手に取り目を走らせた。DNA情報にしては一枚というのは少なすぎるが必要事項以外は省力しているので十分だった。それでも通勤ラッシュの地下鉄のうにすし詰めにされた活字たちを白河医師は事も無げに読み上げていく。が

その表情には歓喜よりも驚愕の割合が大きかった。

「……なるほど……そういうことですか……」

だがすぐに安藤正樹に見せた欲に眩んだいやらしい笑みを浮かべると、結果用紙を握りつぶして彼は研究室を後にした。

誰も居なくなった研究室で投げ捨てられたしわだらけの紙玉、その表面には文字が文様のように羅列されている。細々した文字の中に一つだけ大きな文字が書かれていた。

＊ 安藤正樹 安東真崎 ダブル確立100% ＊

俺は人を殺せるのか？

答えは‘No’だ。数日前、この病院の医師に渡された折りたたみ式のナイフを手の中で遊びながら、俺はそんなことを考えていた。心臓病薬の袋に入っていたナイフ。銀白色のそれはボタン一つで刃の部分を簡単に展開できる実用重視の携帯武器、そんな感じた。切れ味鋭い音と共に飛び出す両刃のナイフは刃渡り30cmほどで短い。刃物特有の金属光はそれがレプリカではないことを語り、しかし刃こぼれ一つない刀身（ナイフでもこう呼ぶのだろうか？）はまだ一度も使われていないのか、または余程の強度であることを示していた。

で、だ。答えは‘No’だ。

俺は軍人でもなけりや殺人鬼でもない、だから人を殺すなんて無理だ。これは精神的な問題であり倫理的な問題でもある。十七歳の俺の体つきは成人のそれと変わりないどころかよっぽど遅い、実際に殺人という行為を行うことぐらいはできるはずだ。

だが答えは‘No’だ。度胸が無い、それで結構。戦争にでも駆りだされない限り俺は人を殺さないだろう。

しかしダブルは人間ではない。だから殺しても、それは法的に殺人ではない。

数日前、マサキは発作で倒れた俺をこの病院に運び込んでくれた。だがその顔を見て俺が感じたのは食欲や性欲にも類似した奴の心臓への希求心だった。

マサキの心臓を移植すれば俺は助かる、初めて死の恐怖を味わった俺は目が覚めた瞬間から、病院の一階特別室でそのことばかり考えていた。

奴がダブルかどうかはもうすぐ判る。

折りたたんだナイフを懐にしまうとすぐに、DNA鑑定を頼んだ  
医師が俺の病室に入ってきた。

「先生、結果はどうでしたか？」

俺の質問に医師は答えなかった。

無言のまま、医療用ベットに腰掛けている俺に近づいてくる。  
そしてあのいやらしい笑みを浮かべて言った。

「そんなに結果が知りたいですか？」

「え、ええ、まあ……」

生返事でそう返すと、今度はしっかりと医師の口元が歪んだのを  
俺は見た。

次の瞬間、俺は襟元を医師に掴まれてベット上から、掃除の行き  
届いた見た目綺麗なタイルの床へと強引に引かれる。顔面から床に  
投げ落とされた。鼻の軟骨が砕けたような衝撃と鼻奥に燃えるよう  
な熱さを感じる。鼻血が出ていた。

「これが答えですよ」

これは、立ち上がった俺に吐きつけられた医師の言葉だ。

俺には医師の言っていることもやったことも理解できていなかった。

「な、なんでこんな……？」

自然に洩れ出た疑問を医師は嘲笑う。

「なんでですって？ ふふ、そうですね、知らずに死んでいくのはいかに貴方と言えどあまりに不憫。では答えてあげましょう……」

俺と医師との距離は約2mほどで、俺の背後には大きな窓ガラスがあった。患者に外の景色が良く見えるようにとの配慮だろう。いりなりの混乱に俺の心臓も脈打つ速度を上げる。

苦しくなって胸を押さえたが医師はそれになんの反応も示さず、懷から黒光りしたものを取り出した。

「っ！！」

拳銃だった。

警官つかっているようなりボルバータイプではなく連射可能なオートマチックタイプ。

レプリカだろうか？ いや、こんな状況で取り出すのだ。おそらく本物だろう。

だが何故……それに医師は答えを出した。

「鑑定結果が出たのですよ。安藤正樹さん、貴方と安東真崎の関係は100%ダブルと本物です」

予想外にも、医師の言葉は俺が待ち望んでいたものだった。

マサキがダブル。DNA検証の結果が出た。奴の心臓を移植すれば俺は100%助かる。俺は胸の苦痛に後押しされ奴の心臓への欲望を更に強くした。

銃を突きつけられている今のシュチュエーションも忘れて。

「わかつちやいませんね」

……と、俺が余程嬉しそうな顔をしていたのか、医師はまるで汚

物のように俺を見た。

「私は、貴方と安東真崎の『関係』は100%ダブルと本物、と言ったのですよ。それにこうも言いましたよね、今の私たちの知識では、理論的に誰々の『関係』が本物とダブルとはわかってても、どちらが本物でダブルなのか判断する手段は得ていない、と」

医師は何故か『関係』という言葉をやに強調している。

二度目の診察（相談）の時、この医師は言ったのを思い出す。

＜彼のDNA塩基配列と、あなたのDNA塩基配列が完全に一致すれば、あなたと彼は、本物とダブルの関係になりますからね＞

俺は、それは「マサキ」ダブル」としか意味を捉えていなかった。俺が本物で、マサキがダブル。そう思うのは人間として当然の心理だろう。

だがこの言葉にはもう一つの可能性が潜んでいる。

「……………まさか」

一つのそれが脳裏をかすめて、俺の心に大きな不安を置いて帰った。

さらに拍動が激しくなり比例して胸の痛みも増す。

砂漠の中で飲む水は命をつなぐ希望に等しい…………俺は医師の言葉に希望を求めた。だが医師はおかまいなく命の水を払いのける。

「安藤正樹さん、いや安藤正樹、ダブルは貴様の方だ」

医師の口調がさきほどまでとは正反対に鋭くなった。だがそれほど気にならない、というより余裕が無い。医師の宣告

で俺は自分自身の全存在を否定された。ショックだった。絶叫する。

「う、嘘だ！」

「嘘じゃない。DNA鑑定の結果で俺は気づいたんだよ。本物とダブルの見分け方をな」

医師の一人称が‘私’から‘俺’に変わっているが、おそらくそちらの方が地なのだろう。患者に対しては礼儀正しくありたいと思っているかは知らないが、俺に対しては無礼なまでにしっかりと銃口を向けている。

医師は続けた。

「ダブルは完璧だった。理論どおり全て遺伝子データは完璧に一致し違いは見つけられなかった。ただ一つの点を除いてだがな」

「ひ、一つの点……？」

「本物にあってダブルに無いもの、23対ある染色体の1対。それは生物の性を決定する性染色体だ。生物である以上存在していないはずの性染色体が欠落していた。穴があいたようにその部分だけが存在しなかったんだよ！」

ペラペラ喋っていたかと思うと突然、医師は俺に向かって銃の引き金を引いた。

銃声を残し弾は俺の背後の窓ガラスを貫通する。

ガラスには貫通痕から蜘蛛の巣のようにひび割れが走っていた。恐ろしくなりその場から逃げ出そうとしたが、医師に銃身で頭部を強打される。滝のように血が溢れ出し、俺はその場に膝をついた。

「何故ダブルに性染色体がないか分かるか？」

医師が何か口にしたが激痛で言っていることが飲み込めない。

血で赤く染まった視界で医師が銃口を向けている。その距離は50cmもない。数日前味わった死の恐怖とは別種の、奪われる側の恐怖。赤く染まった銃口が、まるで血を滴らせる人食いの魔物のように、俺には見えた。

十七年の人生がフラッシュバックする。悪事を働いた覚えは無い、ごく普通の生活をしていたはずだ。このような目に合わなければならぬ因果も通日も見当たらない。

ああ、やはりこの世には神も仏も存在しない……俺はそう確信せずにはられない。

「冥土の土産に教えてやろう。ダブルは生物ではない偽者だ、完璧な、な。見た目で精液や卵が出てきても生殖能力は無い。その証拠にダブルは本物が死ねば消えてしまう。七割を超える不妊率もその事実を裏づけしている……もっとも、俺もこの事実には先ほど気づいたばかりなんだがな」

医師は銃口を俺に押し付けた。

悪意と欲に満ちた笑み言う。

「お別れだ。お前の遺体は本物と比較され、今後の医学の発展に大いに貢献するだろう」

その主翼を担うの自分だとばかりに声には喜びが溢れていた。

「死ね」

頭が痛む、これは頭部を強打されたからだ。

胸が痛む、これは心臓病のせいだ。

心が痛む、これは医師を殺さないと生き残れないからだ。こんな状況でも良心が痛むことに俺は正直驚いた。人間的な感情だ。自分

は本当にダブルなのかと疑問が生まれた。だがそれも生への執着の前では水泡となって消える。

俺は懷に隠していたナイフをすばやく取り出すと医師に飛び掛った。

「なに!？」

俺がナイフを展開するよりも早く医師は発砲していた。

炸裂音と共に飛び散る血しぶき。放たれた銃弾は俺の頭を貫通……しなかった。突撃した拍子に医師が体勢を崩し狙いが外れたのだ。だが銃弾が左肩を貫通していた。

「うわあああああつっ!!!」

病室内に俺のではない絶叫が響く。

展開されたナイフを目の前にして恐怖した医師の叫びだった。

医師が押し倒される形となる。

銃が再び俺に向けられたが、発砲音より先にナイフが医師の眉間にたっていた。

「あつ……」

最後の声を漏らして医師は事切れた。

銃を握っていた手から力が失われて銃が俺の目の前に転がる。生  
の名残がまだ暖かい医師の体を痙攣させていた。

俺の命を奪う者はもういない、そう安堵したのも束の間、

「きゃあああああああああああつ!!!」

様子を見にきた女性看護師の絶叫に安堵感がかき消された。

彼女は医師の死体を目にして顔をブルーに染め、震える足で後ずさりしている。

「ちっ……！」

人を呼ばれる。そう直感した俺は医師の銃を手に取り発砲していた。

銃弾は彼女の腹部を直撃、そのまま彼女は崩れ落ちて意識を失う。だが騒ぎを聞きつけ病院職員が来るのも時間の問題だった。

「へっ、これで俺も逃亡者かよ」

同名の映画のことを思い出す。

妻殺しの汚名を着せられた主人公が、脱走版として逃亡品から真犯人探すという内容だったはずだ。もっとも俺の場合は無実ではない。

すぐ傍に殺した男の体が横たわっている。

マサキの顔が浮かんだ。俺がダブルだと思っていた男。俺の命になるはずだった男。俺が殺人を犯した原因になった男。そう、マサキだ。全て奴が悪い。奴が諸悪の根源だ。

殺してやる。

心臓欲しさではない、逆恨みから来る初めての明確な殺意。

もう一人殺してしまった、一人も二人も同じだ。

それにマサキを殺す、それは俺がダブルかどうか確かめるための最後の手段なのだ。

「うわあっ、なんだこれは！？」

誰かが病室を見て悲鳴を上げた。

俺は医師の銃を手に取りそれで窓ガラスを砕く。

左腕の感覚は既に無い。俺は血に塗れたまま病室を飛び出した。そして走る、奴の家へ向けて力の限り。

「逃げたぞ!!」

病室が騒がしかったが振り返らなかった。

退路はもう無いのだ。

俺は人を殺せるのか？

答えは‘Yes’だった……。

俺は神を信じていない。

これは俺だけに留まらず世界中多くの人が思っていることだろう。この世に神も仏もない、俺がそう確信したのはついさっきだった。だってそうだろう？

本当に神がいるのならダブルなんて無意味なものを作るはずがない。

俺が二人いて何の意味があるだろうか？

それは俺自身の存在を否定する要因になるだけだ。

空に浮いている二つの太陽も全くもって意味がない。そもそもダブルは何のために生まれてきた。オリジナルのコピーとしての存在がオリジナルが死ねば消滅する上に、子孫を残せないなど生物としても不完全にもほどがある。

そして俺はダブルだ、そう医師に言われた。

だが実感は沸かない。だが俺は、オリジナルとは違う俺自身の人生を、俺自身の命で生きてきたのだから、そう感じられないのは当然と言える。

だから俺は、自分がダブルだという事を一欠けらも信用していない。

俺がオリジナルだという真実を確かめるために、今、俺はマサキの家の前（ボロい木造建築アパートの一室）に立っている。

真実を知る方法は唯一つ、俺がマサキを殺すことだ。奴がダブルなら死んでも消滅しない、オリジナルの俺が生きているからだ。医師から奪った拳銃を握り締めた。幸運なことにここまで誰にも姿を見られていない。

マサキは無用心にも鍵をかけていなかった。ドアノブに手をかけると扉は道を開き俺をすんなりと受け入れる。

「ん、誰？」

玄関を入ると、すぐ正面の畳がしかれた部屋マサキはあぐらをかいて座っていた。奴の正面には頑固親父がひっくり返すような丸いちゃぶ台があり、教本らしき分厚い冊子が広げられている。目に付く限りちゃぶ台の上は鉛筆と消しゴムがそこかしこに散乱していたが、部屋は綺麗に整頓されていた。

振り向いたマサキの顔が驚きに染まる。

「ちよっ、どうしたの、そんな大怪我して!？」

こうして会うのはこれで三度目。

マサキも自分と同じ顔の人間が存在していることに驚きはしなくなっていたが、その男が血まみれで突っ立っているのにはそうもいかないらしい。自分の体を見てみると、止血すらしていなかった左肩からの出血は服を赤黒く変色している。

まだ出血しているのかは分からないが左腕の感覚がないので痛みは感じていなかった。

俺は右手に持った銃を背中に隠し、土足のままマサキの生活スペースへと侵入した。

「久しぶりだな」

「え、う、うん……」

戸惑いながらも俺の挨拶に返事をするマサキ。どうやら俺より遙かにお人よしな性格のようだ。

「ま、待ってて、手当てするから」

マサキは俺に背を向け押入れの中から治療道具を探し始める。

俺は背後に回り、銃を向けた。

引き金を引けば簡単にマサキは生き絶え俺の目的は達成される、  
そんな時、

「あの日の夜さ」

マサキは俺に向かって話しかけてくる。

「本当にビックリしたよ。バイトからの帰り道に自分と同じ顔の人が倒れてるんだもんな」

俺は引こうとした引き金が引けなくなった。

俺はあのとマサキに助けられた。マサキに病院に運び込まれなかったら、おそらく俺はあの時に死んでいただろう。

その命の恩人に俺は銃を向けている。胸が痛んだ。心臓病の締め付けられるような痛みではない良心の呵責。自分が酷く浅ましいに思えた。

「なあ……」

俺は訊いた。

「あの時、なんで俺を助けたんだ？ 無視することだってできたはずなのに……なんで？」

「困っている人を助けるのは当たり前じゃないか」

マサキは当然のように言った。

このマサキという人間は本当に善人なのだ。それに比べて自分はただ自分がダブルかどうか確かめるためだけに、この男を殺そうとしている。

「君だつてそうだろう？」

背中越しのマサキの問い、しかし俺は答えられない。マサキの背中を見続けている限り、俺は血まみれの自分を見なければならぬ。光と影みたく、命を奪つても生き延びようとする俺と、なんとか他人の力になろうとするマサキ。

醜い。

卑しい。

この男と一緒にいると俺は自分が最低の人間見えて仕方なかった。我慢できなかった。俺のために治療箱を探してくれているマサキを見ていることが耐えられなかった。

だから

「あ、あつたあつた、これで治療できつ」

俺は、撃った。

頭を、至近距離から、撃った。

狭い室内に銃声が反響し葉莢が銃が排出される。

後に残ったのは銃を握り締めた俺と、額に開いた穴から脳漿と血液を漏らしながら倒れているマサキだけだった。

もう俺は、何も感じなくなっていた。

もうどうでもよかった。

ただ知リたかった。医師にダブルと宣告されてから、自分が一体何者なのかを……。

目の前にあるマサキの体が自分の血液で赤く染まっていく。生命の名残で体が少し痙攣している。それだけだ。マサキの死体は俺に

何も教えてはくれない。虚ろな瞳でマサキの自分の顔を見ても何も分からなかった。

だが分かっていることが一つだけ。

それはこの世には神も仏もないということだけだ。

……どうでもよくなった。自分自身の存在すら。

気づいた時には、俺は、マサキと医師を殺した拳銃で、ごく自然に自分の頭を撃ち抜いていた……………。

……数時間後、住民の報告で警察が安東宅を訪れた時、頭を撃ち抜かれた死体が一つ転がっているだけだった。

T h e   E n d .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1473n/>

---

ダブル

2010年10月10日13時07分発行